

伊藤外科ニュース



87号

2011.9 発行



夏の思い出

今年は、約一週間の長い夏休みをいただきました。患者さんには、ご迷惑をおかけしたと思っておりますがご容赦ください。

ところで、私の幼少期の夏休みの思い出は沢山ありますが、やはり千葉県山武郡にある亡父の生家での体験が一番印象的です。この家は、古い藁葺の平屋の家で五右衛門風呂が土間の中の台所に隣接してありました。祖母は私が遊びに行くと、畑で採れたスイカやトマトを裏庭の井戸の中で冷やして食べさせてくれました。年上の従兄弟に海に連れて行ってもらったり、田んぼのあぜ道で昆虫をとって遊んでもらった事が鮮明に思い出されます。

また、蝉の鳴き声の種類が多さに自然の不思議を感じたり、寝室内に巣をかけるつばめの可愛らしさが忘れられない事でした。残暑の厳しい新宿でも、中央公園の緑のおかげでしょうか、昼間のアブラゼミの騒々しいほどの鳴き声や夕方からの日暮らしのやや寂しげな声が楽しめます。

日本には、約20種類の蝉がいるようです。蝉の鳴き声の種類によって思い出す記憶が違い、また、感じる風情が異なり、少年期の体験はひとの感性を育てる根幹になる事を再認識しました。

ノロウイルスのはなし

さて、今回は食中毒について少し書こうと思います。病原性の細菌やウイルスに汚染された食物を人が摂取した結果起こる下痢、嘔吐、発熱などの疾病を食中毒と呼びます。日本では、梅雨から夏場にピークがあるカンピロバクター、サルモネラ、赤痢菌に代表される細菌性の中毒と、冬場のノロウイルスに代表されるウイルス食中毒が多いようです。

最近では、珍味や肉の生食など食生活が多彩？になり衛生状態が良好になったにもかかわらず、よく新聞紙上に食中毒の集団発生事件が掲載されます。多くの食中毒は、点滴や薬の内服などで徐々に改善し健康を回復できますが、体の抵抗力の弱い方が発症した場合や病原性や感染力の細菌、ウイルスによる場合には重篤化します。

さて、食中毒にならないためには当然予防が重要です。予防には、

- ①付けない（清潔）
- ②増やさない（冷蔵、冷凍、乾燥など）
- ③不活化（加熱、消毒）する。の3大原則があります。

一般に、生の魚介類や肉類には食中毒の原因となる菌が付着している可能性があります。これらを調理したまな板や包丁の取り扱いと手の洗浄が重要です。また、冷蔵庫の能力を考えて中に入れる食品は容量の7割程度とし十分に冷却したり、乾燥状態を保ち細菌の増殖を刷る予防したりすることも重要です。さらに細菌を不活化するためには加熱が最も効果的です。

しかし、ノロウイルスは60度以上で30分加熱しても感染性が失われない報告があり、十分な加熱処理や調理器具の消毒が重要であります。ちなみに厚生省のホームページには家庭でできる食中毒予防の6つのポイントが掲載されていますので興味のある方はご覧ください。





今回の一冊

暁の旅人

著者 吉村 昭

歴史小説、ノンフィクションの分野で多くの話題作を残した作家・吉村昭氏。上野で果てた彰義隊や、ロシアに漂流した大黒屋光太夫、探検家の間宮林蔵など、幕末・江戸ものに興味があるワタクシとしては、そそられる人物を題材にした作品が多いのだが、なかなか機会がなく、実は『桜田門外の変』ぐらいしか読んでいない。もうちょっと年を重ねたらゆっくり読んでみたい作家だと思っていたら、三弓の本棚に『暁の旅人』を見つけた。

これは、日本近代医学の開祖ともいわれる松本良順を題材にした歴史小説。順天堂大学の基礎をつくった洋医学者・佐藤泰然の息子である。松本良順の略歴をざっくりと本文から引用すると、生まれは天保3(1832)年。幕府奥医師・松本良甫の婿養子になり、幕府の医官として長崎に遊学。オランダ医師・ポンペイについて西洋医術を身に付けた。江戸にもどって医学所頭取となり、幕府崩壊を眼にして奥州に脱出。幕府への忠誠をくずさぬ会津・庄内両藩のもとで戦傷者の手当てにつくした。明治に入ってからは、日本初の西洋式私立病院を創立した後、陸軍軍医総督に任命され、明治40年に75歳で鬼籍に入った。

ご存知の通り、漢方医学が主だった江戸時代、西洋から移入され始めた医学は「蘭方医学」と呼ばれていた。別称「紅毛流(こうもうりゅう)医学」。「紅毛」とはオランダ人のこと。一般人がいかに蘭方医を気味悪がっていたかがうかがえる呼び名だ。

古くから「極悪非道の行為」とされていた「腑分け(人体解剖)」が日本で初めて行われたのは、以外にも早く、江戸中頃の宝暦4(1754)年。明和8(1771)年には前野良澤や杉田玄白らが女性の刑死体の腑分けを行い、その3年後に、初の日本人による解剖図を記した『解体新書』を完成させた。そして日本人に臨床医学を教えたシーボルトが長崎に着いたのが1823年。松本良順の足跡の前に、こうした人々の歴史もあったわけである。

『曙の旅人』の後半は、良順自身が戊辰戦争に巻き込まれていく時期を描いているが、個人的におもしろかったのは、良順と彼の新選組の交流である。この事実は新選組関連の小説、ノンフィクションにも出てくるので、有名な話だが、この小説で初めて知った事実(?)がある。

新政府軍に対抗するため蝦夷に向かう榎本武揚に、ともに蝦夷行きを要請された良順。腹を決めかねていたところに、新選組の生き残り・土方歳三が訪ねてくる。当然、蝦夷行きを懇願されると思った良順に、土方は強い口調でこう言うのである。「先生は、前途有為なお方です。蝦夷なぞには行かず、この地から江戸におもどりになされるべきです。戦乱に巻き込まれ、命を失うようなことがあってはなりません」。土方のこの言葉で、良順の未来は決まった。

う～ん、こころへんが歴史小説を読むときの難しさ。もしもこれが事実だとしたら、ワタクシのなかの土方歳三の人物像をいまひとつ塗り替えなければいけない。それはうれしい塗り替えなのだが……。まっ、こういうことがあるから、歴史小説はやめられないのです。

(一弓)